

おとなの学びに関する学習支援のあり方

～特質からみた学びの一考察～

山口 武彦

御子貝雅子

平野 晋

【目次】

I はじめに

II おとなの学習者の特質

III おとなの学習者の特質からの考察

1 「不安」を解消する学び

2 「経験」を生かした学び

3 「コミュニケーション」を生かした学び

IV おとなの学習者の特質を生かした研修展開例

V まとめ

参考および引用文献

I はじめに

今回、学校現場から離れて、小学校・中学校・高校と校種の異なる者同士であらためて学校について話し合う機会をもつことができ、その中で日頃から感じる不安や疑問点に共通するものがあることに気づいた。

例えば、児童生徒の成長を願う思いは同じであるにもかかわらず、職員・保護者・地域住民が、相互的にまたそれぞれの間で、その思いがうまく伝わらないため、指導の充実がかなわず、多少なりとも児童生徒にもその影響が及んでいること。また、学校教育に対する厳しい評価により教師が自信をもって児童生徒に関わることができない傾向も徐々に現れてきているのではないかと思わ

れることなどである。

そのような中、学校では、希望研修や校内研修などとして、指導技術の向上や各々の状況認識を深め、より良い学校運営のあり方などについて学習する機会を設け、様々な状況に対する資質の向上や問題解決に向けて取り組んでいる。

しかしながら、現実にはわれわれ教員は日頃の校務の多忙などを理由に真剣かつ集中して研修に取り組めないなど、十分な効果は上げられていない面もあるように思われる。

そこで、教員という教える立場でありながらも学習する意志をもったおとなの学習者として、おとなの学習者の特質やそれを支援する方法や手法について考え、自分自身も含めて、各々を高め、変えること変えることに臆せず、より前向きに主体的に学ぶことについて考察する。

II おとなの学習者の特質

おとなの学びについて考える場合、まず必要なことはその対象である、おとなの特質を理解することである。ここでは、おとなの学習者のもつ様々な特質と、さらにその特質に対応した学習支援者の支援上の留意点等について、下記の文献一覧よりまとめる。

著 者	著 書	出 版	発 行 年
エデュアード・リンデマン (堀 薫夫訳)	『成人教育の意味』	学文社	1996
マルカム・ノールズ (堀 薫夫、三輪健二訳)	『成人教育の現代的実践』	鳳書房	2002
クラウス・マイセル他 (三輪健二訳)	『おとなの学びを支援する』	鳳書房	2003
パトリシア・クラントン (入江直子、豊田千代子、三輪健二訳)	『おとなの学びを拓く』	鳳書房	2005
ジェニー・ロジャース (藤岡英雄監訳 徳島大学生涯学習研究会訳)	『おとなを教える 講師・リーダー・プランナーのための成人 教育入門』	学文社	1997
ウィリアム・A・ドレイブス (三浦清一郎、末崎ふじみ共訳)	『研修・訓練における成人指導の方法』	全日本社会教育連合会	1990
ジョン・デインズ他 (小川 剛、妹島長子訳)	『おとなが学ぶときに』	全日本社会教育連合会	1996

○学習に対する不安や恐怖心と自分に対する過小評価やプライドが混在する。

おとなは学びたい、学ばなければいけない。という意志をもって学習に参加するが、その反面、周りの参加者や支援者に対して「自分は愚か者に見られはしないか、何か失敗をしでかしはしないかという不安がある。これがおとなの学習者の最も著しい特徴の一つである。」(ロジャース P17)

おとなとは、それぞれの生き方について今までの経験に基づき、それなりの成熟した考えをすでにもっている。それがプライドとなり、学習者という立場に置かれるときに、逆に学習へ不安や怖じ気づくという恐怖心を導くことになる。

この特質に対応する支援としては、学習支援者による学習環境の整備や心理的な安定をつくりだすさまざまな支援が必要となる。主に学習の開始時に抱く感情なので、その解消や減少は今後の学習への意欲に強い影響を与える。

○学習に対する意欲や主体性は、その学習する環境や自分の身体的状態に左右される。

「食べ物、庇護、安全な環境といったより基礎的な欲求が満たされなければ、人は自己実現に向かうことはできない。」(クントン P13) という人間の基礎的な欲求と、さらに、「成人は、心地よい環境に対してはより調和的であり、不快な環境に対してはより敏感になっている。」(ドレイブス P21) という、より良い環境を欲するというような、ある意味わががまに近い欲求をもつ。これは、今日のおとなは、日常的な生活に対して不快を感じるものがほとんどなく、快適な環境で生活を送っているため、ちょっとした環境の変化にも敏感であり、またその影響を受けやすいということである。

また、年齢からくる衰えなどの身体的状態もまた、学習能力に影響を及ぼす原因の一つでもある。

したがって、学習環境の整備として、くつろげるような物的環境(座席、喫煙、温度、装飾など)を整え、過ごしやすい快適な環境を用意しなければならない。また、視力や聴力の低下を考慮に入れた音響や照明の工夫など、身体的状態を配慮した対応も必要である。

○おとなの学習者は多様な動機をもって学習に参加する。

おとなの学習者の参加動機は顕在的な動機と潜在的な動機があるといわれているが、実際には、はっきりと区別するのは困難であると思われる。ドレイブスは「人間の精神的、心情的、身体的社会的状態を統合したものが、人々の学習に対する動機を決定する。」(ドレイブス P27)と

し、ロジャースでは「おとなが学習に入る動機の唯一共通の特徴は、そのとてつもない多様さにある。最も単純な動機は外発的動機。つまり、状況から迫られるような学習である。」(ロジャース P46)としている。一つの動機から学習が始まることもあれば、いくつかの動機が重なって始まることもある。そのような中でも、すぐに役に立つ実用的な知識や技能の習得を最初の動機にするおとなの学習者は多いと思われる。学習者が何を期待して学習を行うのかを学習者と学習支援者が確認することにより、より学習者のニーズに合った学習計画の立案に役立てることができる。学習者はそこで得た学習経験から自信を持ち、学習活動を通じた人とのつきあいの輪も広がり、次の新しい学習へとつながっていくことにもなると考えられる。

○おとなの学習者は経験を資源として学び、学んだことを経験として蓄積する。

おとなの学習者は、今までの人生の中で実に多様な経験をもっている。リンデマンは経験について「成人教育のもっとも高い価値をもつ資源は学習者の経験である。」(リンデマン P8)と言っている。その経験が学びに生かされるとき学習者は主体的に学ぼうとする意欲をもつ。また、デインズが提唱したように「おとなは長年にわたって得た多くの知識と経験の蓄積を、自分の学習の場にもってくる。」(デインズ P12)のである。

さらに、経験は「蓄積された経験が学習の豊かな資源になる。」(ノルズ P38)とあるように、学ぶことによって蓄積され、新しい学びの資源となっていく。それゆえ、経験は、成人学習者の生きたテキストとなるのである。

さらに、おとなの学習者は新しい経験をつなぎ合わせる経験の基盤をもっている。そして、「すべてのおとなの学習者は自分自身の背景や経験や価値観の範囲で学習に取り組んでいる。」(クントン P106)のである。

そこで、経験を学習の資源として活用するために、学習支援者は学習者の経験を十分に引き出す支援を工夫していくことが大切であると考えられる。

○学習に取り組む際に、自己決定性が大きな推進力となる。

おとなは、経験が豊富であるがゆえに、その経験をもとに自らの行動を決定するすべをもっている。つまり、クントンがいうところの、「おとなは自己決定的である。」(クントン P19)と定義される。さらに「人は、他人からも自己決定的な存在として見られたいという深い心理的なニーズをも発展させる。」(ノルズ P42)とあるように、経験からくるプライドが、自己を決定づけ、他人

からよく見られたいという深層心理にもつながっている。

そこで、おとなの学習者の学びという観点でみると、「すべての学習は成人は学びたいがゆえに成立している。」(ドレイパス P14)または「ほとんどすべての成人学習者は、自由意志で学習に参加する。」(ロジャース P46)とあるように、自己決定は学習の動機づけという点で非常に重要な役割を担っている。

それゆえ、自己決定性は、おとなが学ぶ上で必要かつ有効な特質であるといえよう。学習プロセスの上では、学習者が自己決定できる場面を多く取り入れ、自らが考え、創造する意欲を生かす手だてを考えることが必要である。

○おとなの学習者は互いの情報を伝え合うコミュニケーションを基盤とする対話型の学習を求める傾向がある。

「人は自らのあるいは他人の知的経験の結果得た情報をお互いに受信し発信して生活に必要な知恵を得たり与えたりするものである。」(中継 P204)とあるように、人は何かを伝えたい・何かを教わりたいという欲求をもっていると思われる。おとなの学習者は学校時代の経験から、講義型の学習方法のイメージをもって学習に参加するが、実際は「同様の発達課題をもっている仲間をすぐに見つける。」(ホルズ P56)ことができ、「集団でコミュニケーションをとりながら学習する。」(マイセル P27)ようになる。問題解決に向けての学習者相互の対話が活性化することにより、学習者は互いに影響し合いながら良好な人間関係を築き、さらに学習を深めていけるものと考えられる。

○おとなの学習者は学習に即時性な効果を求める。

おとなの学習者は、何かしらの目的をもって学習に参加している。その中で、「応用の即時性(immediacy of application)という枠組みをもつ傾向にある」(ホルズ P56)「即効的な学習の効果を求める」(藤澤人 謹)とあるように、学習の効果をすぐに求めたがる傾向にある。これは、日々忙しい生活を送っているがちなおとなが、目的をすぐに達成することで時間的な制約から逃れ、自分の学習の効果をすぐに確認したいという心理が関わっていると思われる。

また、自分で学んだことを知識として蓄積し、自分なりに応用することで学習の効果を見いだそうとする面も考えられる。

そこで、この特質に対する支援としては、学習プロセスの中で、学習者が学習の効果をはっきりと感じられる

ような指導を心がけ、学習に参加してよかったという満足感を見いだせるように支援していくことが大切であろう。

そして、1回の活動で最終的に何がわかり、何を得たのかを明確にわかるように最後のふりかえりの活動を充実させる必要がある。さらに、学習の成果がはっきり表れるように、具体的な作品や冊子などにまとめられ、参加者全員に配布できるとよいだろう。

III おとなの学習者の特質からの考察

おとなの学習をスムーズに開始し、それぞれがこれまでの経験を生かし、相互学習をととした主体的な学習を行うにはどうしたらよいかという点に着目して、おとなの学習者の特質および支援の方法を三つの観点から更に具体的にまとめて、考察していく。

1 「不安」を解消する学び

(1) はじめに

おとなの学習者の特質の全般について分類してまとめるなか、特に、自分が新たな学習をはじめる時と、また逆におとなに教師という立場で指導にあたる時の双方の立場に立ち、いかにすれば主体的に学習に望みそれを学び遂げること、また指導者として目標を達成することができるだろうか、ということを考えた。

そして、まず自分のなかで関心をもったのが、おとなの学習者のもつ不安という特質である。おとなは、自由意志によって学習を始める。この学習する意志が薄れることなく、主体的に学び続けるためには、やはり学習のスタート地点などで、多くのおとながもっているさまざまな不安を解消または減少させる必要がある。それにより自信をもって学習に臨むことができるようになるのである。

そこで、不安とはどのような環境状況や心理状況で起き、それを解消または減少させるためにどのような学習支援が必要であり有効かということについて、おとなの学習者の特質をもとに、不安状況のとらえ方と学習支援全般の観点から、不安を解消する方策について考察していきたい。

(2) おとなの学習者の不安状況のとらえ方

まずはじめに、学習の定義から不安というものを考え

てみると、「学習とは、行動及び行動可能性における比較的永続的な変化である。ここでいう行動及び行動可能性とは経験から生じるもので、病気、疲労、薬物によって引き出される一時的な身体状況に起因しない。」(メリア P295)と定義している。

つまり、「学習とは、変化であり、変化は多くの人々にとって不安や痛みを伴うものである。というのは、人々は変化より決まりきった仕事、習慣、慣れ親しんでいることの方を好むからである。」(ケントン P269) ということは、学習に対する不安とは、根本的には変化に対するものだということができる。 つぎに、学習上、具体的にどのような状況時に不安を感じるのかということをも5つのカテゴリーに分類し、その解消のための具体的な支援方法や学習方法についてまとめる。

①行動を起こす際の不安

自分で物事を選択し決定しなければならないときや、新しい知識の必要性を感じているが、それにはいまもっている信念を変えなければならないという怖じ気づいた心情というような、関心や必要性はあるが、今までとは違った新しいことを始めたりまたは始めようとするときの不安である。

支援方法として、自分自身で物事を決める能力を十分にもっているという積極的な励ましや、心がわずらわされない穏やかで和やかな雰囲気での学習環境づくりも必要である。

学習活動全体の雰囲気をつくりだす手法として、アイスブレイクは欠かせないと思われる。この場合はまさに学習のスタートでの不安なので、他の参加者と和やかな雰囲気でお互いの現在の心境などを理解し、共感できるような内容の自己紹介やそれに関連したゲームなどが有効であろう。

②他者の言動に対する不安

笑いものにされたり、拒絶するような表情や体の動きを感じたり、また学習時に理由を伝えられないままに質問され戸惑わされたり、自分のことを勝手に他人に判断されたり、中傷されたりするときの不安である。

支援方法として、学習者の問題や業績などについて他の人から認められることを保証すること。つまり、関心や尊敬の表現が緊張や不安を和らげる重要な手だてになる。

それには、それぞれが他者の立場で考えたり感じることができ共感的理解を図る必要がある。その手法として、「様々な立場の人の意見や考えを理解し、多様な視点から物事を考察するロールプレイが考えられる。これ

は、自分の心を感情のまま自由に表現することができるので、人間関係の改善などに有効な手法である。」(廣瀬 P78)

③様々な状況を推測しての不安

何を期待されるのか、どのように評価されるのか。また、自分が愚か者に見られたりはしないか、何か失敗をしてかきまわらないか、という周りの状況ばかり気になり、自分に自信がもてないときの不安であり、おとなの学習者の最も著しい特徴の一つである。

支援方法としては、自信のない学習者を勇気づける方法の一つとして、報酬という手だてがある。報酬とは、言葉の励ましや微笑み、うなずきといった簡単なことでも、気持ちの上で学習者の安心感を高め、それにより学習も高まることにつながる。

そして、グループ内で自分の意志を伝えることによって自信を深めていく討議という学習方法も有効である。これは、学習者間の交流を生みだし、学習内容をより深く知ろうとする気持ちを育成する働きもある。しかし、発言の乏しい人には、質問を選択的に するとか、じっくり考え抜く時間的余裕を与えるなどの配慮も必要になる。

④過去の経験による不安

学校時代の成績が悪く、何らかの屈辱的な思い出を抱いていたり、自分は優秀ではないという意識もっていたり、また学校での経験以外でも過去に失敗したことなど、過去の苦い経験が心に強く残って生じる不安である。

支援の方法としては、例えば学校での思い出が強い屈辱的なものであれば、学校教育を連想させるようなものはなくした方がよいが、学校での経験により、学業に関してマイナス思考的な考えを抱いている場合には、成人学習活動は学校教育とは異なった楽しいものであるという解釈に変えていくような支援の方法がよいであろう。

これも、最初の授業でアイスブレイクとして自己紹介やレクリエーションなどでまずは学習活動全体において居心地のよい環境をつくりだす必要がある。そして、物的な環境もそうであるが、支援者や参加者との関係においても親しみを感じる和やかな雰囲気が必要となる。

⑤身体的不安

身の周りの物的・感覚的環境に対する不安や自分の身体や感覚の変化に伴う不安であり、不快な環境に対する不安は、学習環境を過ごしやすく快適なものにすることによってある程度解消されるであろう。また、歳とともに知的能力の衰えに気づいた場合の支援も学習に取り組

もうとする動機に比べればささいなことであると励ますことで勇気づけられるであろう。しかし、加齢とともに短期記憶の能力が衰え、記憶障害が生じやすくなるのは事実である。したがって、学習の過程による過度に短期記憶に依存するような講義とか演示などの方法は、その事実配慮した手だてを施されないかぎり記憶の定着は難しい。他の場合にもあてはまるが、この場合特に学習効果が上がる一つの方法として、記憶に強く残る、実際に“する”ことである。

したがって、参加者の健康状態や身体の状態にもよるが、学習の内容に合わせて参加体験型学習のいろいろなアクティビティを工夫して、学習を強く印象づけることがよいであろう。

(3) 学習支援全般からの不安を解消するための方策

ここでは、学習支援者がどのような点に留意しておとなの学習者を支援すれば、不安や極度の緊張を感じることなく、学習に主体的に取り組むことができるのかを、学習支援の観点からまとめる。

①学習環境の整備

学習を開始するにあたり、参加者の年齢構成や職業など事前に実態がわかっているれば物的な環境の整備はある程度事前に可能である。しかし、参加者の実態が詳しくつかめないようなときでも、学習内容から推測してできる限りやっておかなければならない。

また、人は友好的な雰囲気の中だけでは精神的にも安定して過ごすことができるので、学習環境における心理的な雰囲気は更に重要となる。そして、ともに開始後の状況も注意深く観察し、臨機応変な対応が必要となる。

(ア) 物的な環境（くつろげるような過ごしやすい快適な環境）

- ・ 調度や備品は、成人向けサイズの快適なものにする。
- ・ 会議室は堅苦しくならないように整え、おとなの嗜好に合うような装飾にする。
- ・ 視力や聴力の低下を考慮に入れた音響や照明の工夫をする。
- ・ 相互交流のできる座席配置を取り入れる。

(イ) 心理的な雰囲気（受容され、尊敬され、支持されていると思える雰囲気）

- ・ 緊張から解放された、穏やかで心がわずらわされない、暖かく和やかな雰囲気を意識する。
- ・ 罰やあざけりの恐れのない表見の自由。
- ・ 支援者は生徒の言ったことをしっかり聴く。
- ・ 単独ではけしてなし得ないような大きな成果に向

けて、一人ひとりを励ます強力な手段として、協力的な集団となるように心掛ける。

②学習支援者の支援方法

「他のいかなる要因よりも、学習の雰囲気の在り方により大きな影響を及ぼすのが、教師の行動である。」（ハルズ P44）学習支援者の言動が、学習の雰囲気をつくり出し、それがおとなの学習者一人ひとりに影響を与える。不安をもっていればそれを解消する手だてを講ずる必要があるが、できる限り、はじめから不安を感じることなく学習活動に参加することができれば、おとなはより主体的に学習に取り組むことができるであろう。

(ア) 集団としての支援…集団意識を協調的に促し、よい人間関係をつくる。

- ・ 協同的な活動を推進し、競争や評価を生むことを抑制する。そして学習者間の相互信頼と助け合いの関係を作り上げる。
- ・ 共同探求者としての相互性の精神およびその雰囲気づくり。

・ 支援者は自分自身の感情を表現し、そして相互探求の精神のもとに、共同学習者として、学習資源提供に貢献する。

(イ) 経験を考慮した支援…苦い経験を払拭の方向に、自信のある経験は尊重する。

- ・ おとなの生活経験や職業経験に注意を向ける。
- ・ おとなの学習活動を学校教育とは異なった楽しいものと解釈させる。
- ・ 正規の学校教育を連想させるようなものはなるべく少なくした方がいい。

(ウ) 言語表現的な支援…支援者は使う言葉にも留意する。

- ・ 専門的な言葉を用いた場合、用いる理由を明らかにし、それぞれを説明できるようにしておく。
- ・ 人に不快を感じさせるような言語を使ったり、言及することがないように気をつける。

(エ) 個々を意識した支援…個人にも関心をもち集団から外れないように配慮する。

- ・ 一人残らずディスカッションに引き込まれるように気を配る。
- ・ 全員が理解できるような課題を工夫する。

(オ) 個人を尊重する支援…学習者のもっているものを尊重する。

- ・ すべてのおとなの学習者を、人権、性別、能力、背景、生来の気質などにかかわらず、平等な価値のあるものとして受け入れる
- ・ おとなの学習者の人間的価値を受容し、彼らの感情

と意見を尊重する。

えるようにする。

(カ)評価する際の支援…精神的にマイナスとなるような評価はしない。

・評価は支援者からの一方的なものではなく、相互的な行為として行う。

・何かうまくやったときには直ちに報酬(関心と尊敬)を与

③効果的な学習方法例

学習方法	手 法	特質(不安)に対する効果	問題点・留意点
グループ 討論	集まった人々がある事柄やある分野の知識、あるいは一連の態度などをともに探求していく際に前もって計画され、工夫される活動。	・グループ内の学習の雰囲気をつくるのにふさわしく、暖かい空気を生みだし、参加者相互の関係を密にし、互いの関心を高めることができる。	・両極端な発言者をどう扱うか。
ロールプレイ	学習の内容に応じた場面設定をし、学習者が役割(話し手、聞き手、観察者)を分担して演技することにより、様々な立場の人の意見や考え方を理解し、多様な視点を育てる。	・自分の心を感情のままに表現することができるので、人間関係の改善に有効である。また他者の立場に立って考えたり、感じたりできるので、共感的な理解を図ることができる。	・人前に出ることが苦手な人には苦痛。
アサーティブ トレーニング	日常生活の場面における、具体的なコミュニケーションの在り方をトレーニングする。 (相互尊重のコミュニケーションスタイルを学ぶ。)	・他者の気持ちになって考えたり感じたりすることを学ぶ。	・一つの答えに出そうとする。
シミュレー ション	暮らしや社会の中でより深く理解する必要のある課題を取り上げ、一定の状況を模擬的に体験し学ぶ。	・模擬的な体験をすることにより、自分中心の考え方から離れて、行動したり考えたりすることができる。	・学習者を対立的状況に向かわせる場合もある。
アイス ブレイク	自己紹介・他者紹介、レクリエーション、クイズ、連想ゲームなど。	・はじめに学習者の緊張や不安を軽減し、お互いが知り合い、早くクラスになじみ、同時に支援者が参加者と知り合いになることができる。	・学習者のあったやり方で支援者が変化に富んだものを工夫する。

上記の学習方法は、何らかの方法で自分自身を表現することにより、自分の殻を破り、周囲の参加者や支援者に関心を示し、参加者同士や支援者とお互いを理解し合うことをとおして、不安や緊張を取り除くことができる可能性がある。しかし、それぞれが、逆に人間関係をぎこちないものにしてしまう危険性もはらんでいるため、その利用にあたっては参加者の実態を見極め、実施の状況を随時観察して、細心の注意を払わなければならない。

(4) まとめにかえて

おとなの学習者の特質としての不安の状況と解

消のための支援という観点からまとめたが、実際にこのような支援と学習方法などで、おとなの学習者が不安を取りはらい、主体的に学習することができるようになるのだろうか。このことについて、自分自身が実際に市民講座などの研修会に参加した一例で、感想を含め考察する。参加者は7～8人の50歳から70歳ぐらいのボランティアに興味をもつ方々。まず座席の配置を、フォーマルな講義形式から、学習支援者を中心にして囲むように変える。実はこのとき席をはずして戻ったときには配置が変わっていた。参加者の表情がはじめの時よりも少し和らいだように見えた。そして、学習支援者のざっくばらんな自己紹介で参加者は

更にほっとした穏やかな表情になる。さらに参加者の自己紹介では、随所に学習支援者の質問やコメントが入り、本人以外の参加者も微笑みやうなずきなど、自己紹介をしている参加者と学習支援者に完全に魅入られている様子がうかがえた。そして、和やかな雰囲気のまま学習が進められた。

この実践例と前述までの考察で、不安を解消または減少させるために、最も必要であり、かつ重要だと感じたことは、学習支援者は不安を感じ緊張している学習者の、その質や度合いを見極め、随時観察し、学習状況によって臨機応変に対応しなければならないということである。学校であれば、同学年でならば同年齢であるし、またある程度の地域性もあるので実態としてはわりと把握しやすい。しかし、成人教育の場合は、すべてにおいてある程度の能力差のある人たちが混在している。時には能力や年齢や教育歴など極端に異なる場合もある。このような多様性をもつ集団のなかで、個人の心理状況を判断し、しかも学習を進める上では、集団としての一個人として対応しなければならない。そして、自由意志で参加しているおとなの学習者は、“やめる”という選択肢ももっている。このような状況で、学習者に適した快適な環境と人間関係のよい雰囲気をつくりだし、有意義で主体的に学習できる環境に変えていく学習支援者には、観察力と判断力、許容力や包容力に優れた幅の広い人間性が求められるであろう。

また、根本的な問題として、おとなの学習者の多くはなぜ不安を抱くのだろうか。それは、先が予測できないから、どのように行動してよいかわからないから。では、それはなぜかというところ、たとえば学校教育での依存的な学習の弊害とか、おとなとして自立した存在と思われないプライドとか、または失敗することが恥ずかしいから自信のないことは避けたいという自己防衛などが考えられる。いずれにしても、自分自身の問題である場合が多い。

おとなの学習者は、新しいことを学びたい気持ちは強いので、不安を感じたら自分自身で何が不安なのかを分析し、それを克服しなければ、新しいことを学び、更にそれを身につけて自分を変えること、つまり自己変容はできない。そして、おとなが自分自身で変わるのを支援するのが成人教育の学習支援者ではないだろうか。

2 「経験」を生かした学び

(1) はじめに

おとなの学習者の特質を文献から抜き出してみると、不安やプライドなどの心理面から、職業や立場の違いからくる社会的な面など実に多様な特質があることがわかる。また、おとなの学習には、老若何女を問わず、いろいろな年代の人々が多様な背景のもと参加してくる。そして、それぞれが一人ひとり違った考え、生活環境、人格をもっているのである。

このような状況で学習を成立させるには、何が大切なのであろうか。

そこでまず私自身の体験から考えてみた。以前、研修会などに参加したとき、最初は不安や心配を抱きつつも、自分の経験を話したり他人の経験を聞いたりして違和感なく学習に取り組み、さらにそういった交流をとおして学ぼうとする意欲の高まりを感じたことがある。また、そういった学びをくり返していくうちに、さまざまな見方、感じ方で物事をとらえられるようになった。

そのような体験を思い起こしてみると、おとなの学習にとって経験というものがいかに有効なのかに気づいた。

そこで、ここでは経験がおとなの学びにとってどのような効果があるのか、経験をもとに学ぶにはどのような方法があるのかを明らかにしていきたいと考える。

(2) 経験とは

一般に経験とは、自分の感覚を通して接触できる対象や、直接的にかかわる事物・事象に繰り返し対応しているなかで技能や知識が獲得されることを意味する。

経験の性質がどうであるにせよ、経験は一人ひとりが自分のまわりの世界を理解する方法や信念、知識を形作っている。

そこで、おとなの学びについて経験との関連性をもとに考えてみたい。おとなの学びにとって経験とはなんであるか。

経験は、行動、考え方、感情を含むものとしてとらえられる。内容や程度の差はあるが、誰でも成長するにつれて人生経験をもっており、おとなはどんな活動をする場合でも、この自己のうちに蓄積された経験をもって活動する。そしてこの経験は、子どものそれとは比較にならないほど多量かつ多様な特徴をもつ。これはおとなの学びの豊かなベースとなり資源ともなりえるもので、子どもの学習プロセスに比べて、おとな自身が蓄積しているさまざまな経験を手がかりとすることがおとなの学びにとって重要だといえる。

学習のプロセス、つまり変化と成長と変容のプロセスにおいては、これまでの経験が土台を形成しているのであり、この意味において、過去の経験を無視することは不可能なのである。どのような学習状況であっても、経験は内部に存在し、けして切り離すことはできない。逆に言えば、これまでの経験を明らかにし、それからあらゆる学習状況の中でその経験を活用する必要があるということである。これらのことをふまえて考えてみると、学習プロセスの中心となる原動力は学習者の経験であるといえる。

おとなの学習者の経験を強調するもうひとつの理由は、おとなのもつ次の特徴から来ている。子どもにとって経験はまだ人格を同一視できるほど蓄積されていないが、おとなにとって経験や体験は自分が何者であるかの人格証明となり、自己を表現する糧となる。一人ひとりの経験は人格化されており、その経験を否定することは人格として否定することに等しい。そのため学習の過程で、その経験を資源として利用することは人格に対する尊敬を意味する。したがって、おとなとして尊重され、個を重んじる学びが展開できるのである。

では、経験を生かして学ぶということはどんなことであろうか。まず、「学習が経験を通して生じるためには、経験は継続性と相互性という二つの主要原則を示さなければならない」(メリアム P264)とデューイは論じている。

経験の継続性の原則は、「すべての経験は以前に起こったことから何かを引きつぐものであり、同時に以後起こることの質を何らかの方法で修正するものである。言い換えれば、学習をもたらす経験とは、けっしてそのときの孤立したできごとだけではないということである。むしろ学習者は、将来の意味について見ていくだけではなく、現在の経験から学んだことを過去の経験から学んだことに結びつけていかねばならない。」(メリアム P264)とあり、相互作用は、「経験は一人ひとりと(その人を囲む)環境を構成するものとの間に存在し、生じる交流」(メリアム P264)であると述べられている。

また、「継続性と相互性の二つの原則は相互に結びついており、経験的な学習の基礎を供給するために、ともによく働くのである。」(メリアム P264)とある。

つまり、経験は継続されるものであるために、孤立したものでなく、過去や未来で区別されるものでもないということである。それゆえ、経験は学びとともに自分自身の中で生き続けるのである。さらに、経験は他の学習者との交流によって生まれることもあるので、つねに他者との結びつきが継続されるのである。

こうしたことから考えると、おとなは専門的なものから体験的なものまで実に多種多様な経験をしているがゆえに、新しい分野の学習に踏み込んだとき、経験の断片を総動員させて思考し学んでいくのである。しかも、その学びは一人ひとりの多種多様な考えからくるものである。ので、当然導き出した考えは千差万別であろう。そこから、さらなる他人と自分の思考が経験として蓄積され、交流する。つまり、おとなの学習者は経験をもとに学び、経験を取り入れ、経験を蓄積するのである。

自分がどのように行動したか、どのように考えたか、どのように感じたかをふり返るプロセスは、ある経験に立ち戻りながら、中に含まれる考え方や感情を用い、経験を再評価するという作業である。その成果は経験に対する新しいものの見方の獲得であり、行動の変化である。学習とは経験によってもたらされる思考、価値観、態度の持続的な変化つまり変容である。したがっておとなの学習とは、思考、価値観、態度の変化につながる経験の蓄積ということになる。

また、このプロセスから、画一的な自分の考えの中に他人の考えを取り入れることで、さらに柔軟な思考が経験として蓄積されることも見逃してはならない。そこで、おとなの学びを考えると、学習者の多様な考えを引き出すことが学習を展開する上で非常に重要になってくる。

(3) 経験から学ぶための学習方法

それでは、経験から学ぶための学習方法を考えてみたい。まず、一般的にいう学習方法の中から経験の効果が考えられる学習例をまとめてみた。

①経験を生かした学習方法

経験を生かした学習方法の一覧表

学習方法	手 法	経験の効果	問題点・留意点
	学習内容を確認したり知識の定着を図るために学習支援者から学習者に問いかけたり、	・経験をフィードバックさせて学習の定着を図ることができる。 ・学習支援者と学習者とのコミュニケーションを深めることができ	・学習支援者の過度なコントロールによって学習者との人間関係に不安感がでてしまう可能性がある

学習支援者と加者との対話	反対に学習者から質問したりする	る。 ・学習者同士で経験の共有化が図れる。すなわち、知識経験の蓄積が期待できる。	る。 ・学習支援者対学習者の場合、ややもすると1対1になりがちで参加者の同等な学習機会を保障できない。
グループ討論	集まった人々がある事柄やある分野の知識、あるいは一連の態度などをもとに探求していく際に前もって計画され工夫される活動。	他の人々と経験を分かち合うことで、お互いを知り、コミュニケーションを深めることができる。また、学習者の経験から、多様な考えを引き出すことができる。	・一人ひとりの経験の差からくる認識の違いが生じることがある。 ・意見の食い違いにより参加者の不安感が増す危険性がある。
ブレインストーミング	学習者同士の自由な話し合いをもとに、特定のテーマについて創造的に問題解決をめざす。	・学習者の多様な経験をもとに話し合ことで、いろいろなアイデアが生まれ話し合いが活性化する。 ・自由な雰囲気です話し合うことで、学習者の交流が生まれ、柔軟な発想が期待できる。	・一人ひとりの学習者の意見を尊重し、司会者になるべく発言しない人がでないように配慮する。
ロールプレイ・シミュレーション	学習者が、現実のあるいは仮の場面を演じ、他の観点に立って物事を見直し、現実の問題を考える。	・自分の経験をもとに演技したり、発表することで自分を自由に表現することができる。 ・演技を通して、新しい体験を経験し自分を見つめ直すきっかけとなる。	・過度な演技になり、目的から離れた活動になることがある。 ・人前に立つことが苦手な人には配慮が必要である。
自己決定型の方法	技能の向上を目的に学習者個人が目標を設定し活動する。	・今までの学習を生かして、計画的に進めることで、学んだことを定着させることができる。	不十分な目標設定により表面的な活動になってしまふ恐れがある。

グループ討論は、自分自身の考えを引き出し、他人に伝え、それについて意見を出し合うことで多種多様な経験が生かされる場でもある。さらに、自分の経験が他人に受け入れられ、共感できるところがあれば、他の学習者とのつながりも深められ、コミュニケーション能力の向上も期待できるであろう。

逆に、注意点としてはすべての学習者が自分の経験を話したいと思っているわけではないということである。中には話を聞くことによって安心し、他人の経験を受け入れつつ、自己の経験と照らし合わせることで学ぶこともあるからである。

また、ロールプレイのように、役割を決めて演じることも自らの経験を生かして、現実の問題を解決していく上で効果的である。自ら演技したり、他人の演技を見たりすることで、別の観点から物事を見られるようになり、多様な考え方、感じ方につながるものと思われる。

さらに、グループ活動も少人数であるがゆえに、お互いの経験を認め合って理解を深めたり、学習をフィードバックする場面で効果がある。また、人間関係が深まれば、さらなる学習意欲の向上が期待できる。

このように、経験は学習の資源となるだけでなく、様々な場面で効果的に活用して、さらなる学びへの力となっていくことがわかる。そのために、学習支援者は、学習の場の設定を工夫し、学習者から自由に自らの経験を引き出すように配慮することが大切であろう。

②経験を生かした学習の展開例

それでは、具体的にひとつの学習展開例から、経験を生かしながら活動を展開する方法を考えていきたい。

下記の表をみていただきたい。これは展開例としてあげた「学校と地域の連携」という研修をもとに学習活動や留意点とともに、経験の効果についてまとめたものである。

学習展開例 テーマ「学校と地域の連携」

	形式	学 習 活 動	経験の効果	活動の留意点
はじめ (アイスブレイク)	1対1 または 3～4人 グループ	1 自己紹介 ①氏名、所属、参加動機 ②好きな食べ物、場所 ③昔の遊び	・誰もが共通して持っている経験をベースに話し合うことで話しやすい雰囲気をつくる。 ・他の学習者と自分との共通項がわかり安心して学習に取り組むことができる。	・なるべく誰もが経験している題材を提示する。 ・用紙やポストイットなどに予め記入して、お互いに見せ合いながら話し合う。 ・なるべく多くの人と行えるとよい。
展 開 (講師と学習者との対話、ブレインストーミングなど)	少人数グループ	2 グループ討論 ①学校と地域の連携の成果と課題、反省点など	・少人数グループにすることで活発に意見交換することができる。 ・他の学習者の考えを聞き、自分の考えと比較しながら自分の経験として蓄積することができる。	・意見を強要せず、自由な雰囲気で行うことができるようにする。 ・他の意見を頭から否定するのではなく、尊重し、話し合いが円滑に進むように促す。 ・出された意見をポストイットなどに書き、同一事項をまとめるなどして意見をまとめる。
	全 体	3 発表 ①学校と地域の連携の必要性について	・他の学習者の多様な考えを知り、自分の経験と照らし合わせて考えを深めることができる。	・グループごとの結果を話すだけでなく、表や短冊にまとめて、見ても分かるように工夫する。
まとめ (自己決定型の方法)	個人グループ	4 ふりかえり ①プリント記入 ②合意形成ワークシート	・これまでの学習を自分なりに整理し、とて研修をふり返ることで、学びを定着させることができる。	・今日の学びを定着させる場面なので、じっくり時間をとって行うことが望ましい。

ア はじめの活動

はじめの活動では学習者の不安や緊張をほぐすためにアイスブレイクを行う必要がある。そこで、自己紹介の手法を考えてみた。ここでは、ただ氏名や所属を言うだけの形式的なものでなく、おとなの学習者の多様な経験を生かして、好きな食べ物や場所、よく行く店などより具体的に話すことがポイントである。こうすることによって、より詳しくお互いの共通項がわかり、親密な関係を築きやすい。また、用紙やポストイットなどに予め記入しておくことで複数の人とも話し合いができる点も効果的である。

イ 展開

展開の活動では、主にグループ討論が中心となる。4～6人程度の少人数グループになることで、できるだけ話しやすい雰囲気を作ることができる。また、話し合いでは、学習者同士の多様な経験をもとにした考えが、お互いの学習効果を高める効果が期待できる。また、お互いの意見を尊重しあうことでコミュニケーションを深めながら学習することができよう。

ウ まとめ

最後にまとめの活動である。ここでは、今までの学習を自分のものとして定着させる必要がある。そこで、大切なのがふりかえりである。他の考えを受け入れ、考えを整理し、自分のものとしていく上で今回の学習のポイントとなる活動になる。そこで、今回は学んだことの中で大切な点をいくつか用紙に記入し、さらにグループごとに合意形成ワークシートとしてまとめるという作業を考えてみた。さらに、ここでは定着をはかる意味でもじっくり時間をとって行うことが望ましいと考える。

このように、経験は学習者同士の多様な考えを導き出すものでもあり、コミュニケーションを深めるために有効なものであるということがわかる。

今回は一つの具体例で示したが、指導者の工夫しだいで多様な方法が考えられよう。

(4) 経験のメリット、デメリット

以上のように考えてみると、経験はおとなの学習者にとって非常に重要かつ有効なものであることがわかる。しかし、経験はすべての学習に有効なものであるのだら

うか。

ット、デメリットを抜粋したものである。

そこで、ここでは経験のメリット、デメリットについて

考えてみたい。下記の表は、参考文献から経験のメリ

経験のメリット・デメリット

項 目	引 用 箇 所	参考文献
メリット	<ul style="list-style-type: none">・自らの思考と信念の体系に沿った人生というものについてそれなりに熟成した考え方をすでにもっている (P22)・彼らのもつ過去体験は、さらなる経験の蓄積、知識獲得への土台になるものとして、その価値を十分に認め活用されるべき。 (P23)・すでに知っていることを、自分がいま学習していることに移し替えることができる (P12)・おとなは、長年にわたって得た多くの知識と経験の蓄積を、自分の学習の場にもってくる (P12)・人間は成長・発達するにつれて、経験の貯えを蓄積するようになるが、これは自分自身および他者にとってのいっそう豊かな学習資源となるのである (P38)・成人が主として自分の経験によって自己の定義づけをするからこそ、彼らはそれに深い価値づけを行う (P50)・それぞれがすでに異なった経験を蓄積しており、それまでに形成されたその人独自の認識を有している (P25)	<p>『おとなを教える』</p> <p>『おとなを教える』</p> <p>『おとなが学ぶとき』</p> <p>『おとなが学ぶとき』</p> <p>『成人教育の現代的実践』</p> <p>『成人教育の方法』</p> <p>『成人指導の方法』</p>
デメリット	<ul style="list-style-type: none">・子ども時代の教育経験により必然的に大きく左右される (P33)・すでに知っている方法が唯一なじみのものなので、依然としてそれがベストだと考えたがる。 (P36)・生徒の期待と教師がこうしたいと考えているものとの間には、どうしても食い違いが生じる (P38)・おとなの学習者はさまざまな面で、学校教育に参加する児童生徒以上に多様性をもっており、さらに「おとなが継続的に行う学習は、過去に身につけた知識や経験に規定される」傾向がある。 (P22)・何か新しいことを真剣に考える時などには、あまりにしっかり身についた習慣や強い信念がマイナスになる (P12)・成人は、多くの固定した思考の習癖やパターンを有しており、この点ではあまり開放的ではない (P50)・学習者は「教師が教えてくれる」のを期待している (P145)・多くの成人は、学校時代の成績が悪く、その時期につながる何らかの屈辱的な思い出を抱いている (P25)	<p>『おとなを教える』</p> <p>『おとなを教える』</p> <p>『おとなを教える』</p> <p>『おとなの学びを支援する』</p> <p>『おとなが学ぶとき』</p> <p>『成人教育の現代的実践』</p> <p>『おとなの学びを拓く』</p> <p>『成人指導の方法』</p>

表から考えると、メリットとしては「彼らのもつ過去

体験は、さらなる経験の蓄積、知識獲得への土台になるものとして、その価値を十分に認め活用される」(ロジャース P23) とあるように、物事を考える上で自らの経験が資源となり、知識獲得への土台となる。さらに、その考えが蓄積され熟成した考えを生むということである。つまり、自分が新しい状況に置かれても、経験からくる熟成した考えのもと、自信と信念をもって自分らしさを出して行動できるよさがあるのである。

逆にデメリットとしては、「成人は、多くの固定した思考の習癖やパターンを有しており、この点ではあまり開放的ではない」(ノールズ P50)、

「すでに知っている方法が唯一なじみのものなので、依然としてそれがベストだと考えたがる。」(ロジャース P36) とあるように、自分自身の中で熟成された考えであるがゆえに、固定した考えや行動パターンに陥りやすいということである。

このように、経験はおとなの学びにとってすべてが有効ではないことがわかる。その取り扱いしだいでは学習効果が半減してしまうだけでなく、学習者に悪い影響を与えかねない。

そこで学習にあたっては、経験が最も効果的に取り入れられるように、場の設定や学習者への言葉かけ、一人ひとりを尊重した学習活動など、学習支援者が配慮していかねばならない。

(5) まとめにかえて

今まで見てきたように、経験はおとなの学びの基盤ともいえるものである。経験を資源とすることで学習効果が増大し、知識獲得を期待することができる。また、経験のメリットの部分でも触れたが、経験の蓄積によっておとなとしての熟成した考えを導き出すことができるようになる。

さらに、一人ひとりに内在している経験をお互いに認め合い、深化させることによって他者とのコミュニケーションが広がり、人間的な成長にもつながることになり、豊かな社会を構築する基盤ともなろう。

反面、ややもすると自らの経験を偏重するあまり、おとなの多様な思考の妨げとなるおそれも十分に考えられる。このことをふまえ、学習の際には、一人ひとりの考えを十分に引き出し、かつ他の学習者の経験も聞き入れ学習に取り組んでいけるように促していくことが大切となる。そのためにまず心がけたいのは、場の雰囲気づくりやアイスブレイクなどの学習活動である。心的不安感から解放されることによって、それぞれの経験が効果的

に学習に生かされてくると考えられる。

また、学習を定着させるために大切なのがふりかえりである。経験を蓄積することでさまざまな思考が生み出されることは先に述べたとおりである。しかし、その思考を行動に結びつけてこそ本当に経験が自分のものとして定着したと言える。

そのために、取り入れた経験を実践しながらふりかえり、ふりかえりながら実践することで本当に経験が蓄積されたことになるのではないだろうか。

おとなは過去の経験から学び、その学びを未来の経験に結びつけながら学んでいる。つまり、経験からの学習プロセスは常に過去と未来を一つのサイクルでまわっていると見えよう。それが、学びのふりかえりであり、新しい思考の構築であるとも言える。

さらに、おとなは新しい考えや知識、感情を以前のそれと比べて吟味しながらその正当性を考える。また、得られた新しい知識が自己の行動や感じ方、考え方の基盤となる。そして、その経験をもとに次のステップへと自己を高めることが可能となる。つまり、おとなはふりかえりをしながら自己を形成し、自分を変えていくのである。

そういったことをふまえ、あらためて経験の必要性を考えたとき、今の教育において大切なものが見えてくる。近年、日本においては以前の知識詰め込み偏重の風潮から、総合的な学習の時間の創設など個の経験を重視した教育がさけられるようになった。また、体験学習や校外活動など、子どもに経験させることで生きる力をつけさせる学習が主流になりつつある。このことから、おとなの学び以外でも経験の必要性が認識されてきたということであろう。

このように、おとなの学びに限らず、人生においてさまざまな経験は生きていく糧となり、自らを変え、なりたい自分になる大きな原動力になりえるのではないか。

さらに、経験をもとにした学びが自己の変容を導き、新しい人生観社会観を見だし、経験を深め、共有し、財産としながら学ぶことが豊かな人生につながると考える。

3 「コミュニケーション」を生かした学び

(1) はじめに

ここでは、リンデマンのいう「教育はコミュニケーションによって進展する」(リンデマン P85) に着目し、おとなの学習者の特質を踏まえて、相互学習がどのような場面

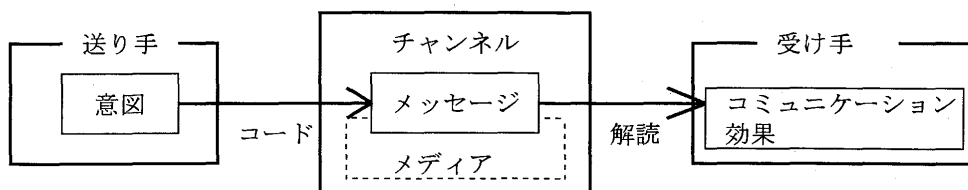
で、どのようにおとなの学びの発展を促すのかを考察したい。

まず、リンデマンのいうコミュニケーションを自分と他者との知的な交流ととらえ、もう一度おとなの特質の中から、人と人とが交流を持って学習するという点に関わることをまとめ、更に学習プロセスの中での相互学習の効果を簡単に考察する。

(2) コミュニケーションと相互学習

コミュニケーションとは、「一義的な規定は困難であるが、一般的に人々がいろいろな記号 (code) を用いてメッセージ (message) を構成し、それを一定のチャンネル (channel) をとおして伝達あるいは交換する過程であると解されることが多い」(教育大辞典 448) とし、さらにシュラムによると「われわれの間に共通性 (commonness) を成立させる、つまり情報、思想、あるいは態度を共有しようとする試みである」(教育大辞典 448) としている。このような共通性を成立させる試みを心理学的領域において、変容過程あるいは影響過程としてとらえ、社会学的領域では、相互作用あるいは人間関係・社会関係という視点からとらえようとする傾向が強い。現代社会では、日常生活の様々な場面でコミュニケーションということばが使われている。また、コンピューターや通信技術の発達にともなって、情報が一度に広く伝達できたり一方的に外部から情報が流れてくるようなことがあたりまえのように行われている。しかし、いかなる技術が発達していても、根本的な部分では、人に何かを伝えたい・何かを教わりたいという欲求からくる行為であると思われる。大田は、コミュニケーションとはどんな行為なのか、その様相を図1のように表した。ここで注目すべきことは、コミュニケーションを行う個人は情報化が進む今、受け手として振る舞うことが多く、そして受け手として情報を得たとき、その情報があるがままに取り入れることはしないということである。このことを大田は「身のまわりの莫大な情報をすべてそのまま受け入れるほど人間には能力がない。情報の個数を減らし、知識を使ってまとめて把握する。このときの知識は過去の経験によ

図1 コミュニケーションのモデル



意図…伝えようとする事柄

コード…意図の表現方法(ことば・身振り・絵・画像など)

メッセージ…意図が表現されたもの(音声や目に見える情報・握手のような物理的な接触) チャンネル…意図のメッセ

って積み上げられたもので、その中身は個人個人の経験によってそれぞれ異なったものになってくるはず。」(細飼 P18) としている。すなわち、受け手は送り手の意図をそのまま読み取るのではなく、メッセージをそれぞれ好きなように解釈して読み取るということである。解釈のもとには受け手の経験であり、経験豊富なおとなの学習者のコミュニケーション特質であるともいえる。そして、自らのあるいは他者の経験から得た情報を互いに伝達し合って、生活に必要な知恵を得たり与えたり、蓄積したりしてともに生活し合っていくものと考えられる。

次に、コミュニケーションと相互学習の関係について考えてみたい。おとなの学習を分析的にとらえると次のような二側面から見ることができる。「それは目的からみた場合の適応的と自己充足的、内容からみた場合の個人的と社会的、そして形態からみた場合の個人学習的と相互学習的といったものである。」(田嶋 P82)

これはあくまでも理念的なものであり、実際はそれぞれの各二面はつながり合ったものではないと思われる。そこで注目したいのは、それぞれの側面からとらえた自己充足的・社会的・相互学習的な学習とは、一方的な伝達型の学習よりも互いの情報を伝え合うコミュニケーションを基盤とする対話型の学習を多く求める傾向があるということである。そこで、問題解決に向けての学習者相互の対話を活性化させることにより、学習者は互いに影響し合いながら良好な人間関係を築き、さらに学習を深めていけるものと考えられる。

「ハートレイらは、人間のコミュニケーションを、人間が相互に影響し合う手段であり、社会過程の現実的担い手である。と定義し、さらにコミュニケーションをとおして人間は社会的存在となる。と述べた。」(田嶋 P87) ここではコミュニケーションを良好な人間関係形成としてとらえ、その効果を得るための手段として、集まったメンバーがそれぞれ持っている知識や意見を出し合って、互いに教えたり教えられたりしながら学ぶ相互学習を中心に考えていきたい。

(3) 学習プロセスごとのおとなの学習者の特質

学習のプロセスを次の3段階に分け、Ⅱにある文献一覧よりコミュニケーションにかかわるおとなの学習者の特質をまとめ、次の(4)にて考察したい。

①学習開始の場面

- ・心の通じる人に出会いたいと思っている。(ディンズ P18)
- ・ほかの人の支持を得たいと思っている。(同上)
- ・ふれあいを求める。(同上)
- ・人とのつきあいに自信を持ちたいと思っている。(同上)
- ・他人とのやりとりを欲している。(クrenton P110)
- ・同様の発達課題をもっている仲間をすぐに見つける。(ノールズ P56)
- ・学習者の集団にはすべて、ある程度の能力差のある人たちが混在している。(ロジャース P129)

②学習実践の場面

- ・集団でコミュニケーションをとりながら学習する。(マイセル P27)
- ・学習者の望む学習方法は対話的なコミュニケーションであり、参加できる出会いがあるものである。(同上 P35)
- ・グループの中で学習活動に参加する度合いが高いほどよく学ぶ。また、グループのメンバーの話を聴き、相互に交流する中からも学ぶ。(ドライヴス P82)
- ・自分でつかんだものを自分の興味と結合させ、学習の好機を自分のものにする。(同上 P83)
- ・ほかの人に関心が向き、お互いの探求活動について知ろうとしたり、話し合ったりする。(クrenton P158)
- ・自分の選択、活動、発見に熱心になると自分の仲間や教育者と分かち合いたいと思う。(同上 P189)

③新しい興味への場面

- ・利己性から利他性に成熟する。(ノールズ P56)
- ・ネットワークを作りながら考え学習していく。(マイセル P27)
- ・人はお互いに話せば話すほど、お互いを好きになるもの。(ロジャース P105)

・協力的な集団は、単独ではけしてなしえないような大きな成果に向けて、一人ひとりを励ます強力な手段となりうる。(同上 P106)

(4) 学習プロセスの中でのおとなの学習者の特質と相互学習

①学習開始の場面

参加動機については、「本人も自覚してはっきり表明できるような顕在的な動機と、本人もはっきり意識していないで表面には出てこない潜在的な動機の二つがある」という考え方もよく出されるが、それはいわれるほどははっきりしたものではない。」(マイセル P30)とされているが、マイセルの行った調査の結果の中から、テーマや職業資格にかかわらないものとしての次の項目に注目したい。

- ・いろいろな人と出会うために参加する。
 - ・周りから期待されている役割を理解するためのアドバイスを得る。
 - ・気晴らしをしたいというニーズから参加する。
 - ・メディア利用に対する関心から参加する。
 - ・余暇活動への動機づけのために参加する。
- ほとんどの項目の動機は、自分一人での学習というよりは他の人との交流を予測しての動機であると考えられる。このような動機を維持させるためには、他の人との交流を求めている学習者の参加動機、学習イメージ、学習スタイルが多様であるという特質を踏まえ、学習開始の場面だけでなく学習実施の場面でも動機が継続するように工夫していくことが必要とされる。

②学習実施の場面

おとなの学習者が実際に学習に参加するときの望むもの(表1)から、おとなの学習者の望む学習方法や教え方は、次のようなものといえる。

学習方法…他の人と対話的なコミュニケーションをとりながら、即効的な学習効果を求め、自分の考え方や行動への変容を促してくれるもの。

講師の教え方…学習者自身が主体的に参加できるようなものであり、そこには知的な刺激と参加のよろこびがあるもの。

表1 おとなの学習者が実際に学習に参加するときの望むもの

参加予定者が望まないもの		参加予定者が望むもの	
(1) 学習者としての扱われ方	・笑いものになること	・平等なパートナーとして扱われること	・生活経験や職業経験に注意が向けられること

<ul style="list-style-type: none"> ・評価されること ・事前に干渉されること ・教え込まれること 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習プロセスに積極的にかかわれること
(2) 学習方法 <ul style="list-style-type: none"> ・講義形式による専門教科書の教授 ・抽象的な(実践から離れた)理論 ・講師のモノローグ 	<ul style="list-style-type: none"> ・問題解決のための知識 ・課題と実践との結びつき ・対話的なコミュニケーション
(3) 教え方 <ul style="list-style-type: none"> ・一本調子の教え方 ・過度の注意 ・型にはまった教え方 	<ul style="list-style-type: none"> ・交互に繰り出される出し物 ・参加できる出会い ・知的な刺激 ・学習プロセスへの自主的なかわり
(4) 講師の参加者へのかかわりかた <ul style="list-style-type: none"> ・職業上の仮面をかぶった講師 ・無関心さ ・かかわりの少なく ・動きの少なさ 	<ul style="list-style-type: none"> ・誠実さ ・親しみやすさ ・共同の参画 ・細やかな表情 ・柔軟性

出典：Boeckmann / Heymen 1996、S. 7、10、und 13

このような特質から、参加型学習の手法に注目したい。参加型学習は、たんなる知識の学習から参加者相互の関係を重視しつつ行動への変容が期待される学習である。その方法は、「学習者が主体的に学習活動に参画し、書いたり、話したり、何かをつくったといった自らの行動を通して、他の学習者とのかかわりの中から学ぶものであり、知識として理解するだけでなく、実際生活の中で行動が変容することが期待される学習方法」(廣瀬隆人 P108)

である。

参加型学習の多くのアクティビティの中から特にコミュニケーションを重視し相互学習を深めることが期待できるものを挙げ(表2)、それを活用した相互学習プログラムの例を表3(コミュニケーション・学びの発展への促し)をもとに考え(図2)、その効果や留意点について考えてみたい。

表2 参加型学習でコミュニケーションを重視したアクティビティ例

アクティビティ名	学 習 方 法	コミュニケーションの効果	留意点・発展
アイスブレイク (自己紹介 他者紹介)	時間が限られている場合には、2-4人程度のグループを作成して自己紹介を行う。また、他者紹介は、カードに記入してそれに従って他者に紹介してもらい、カードを用いて互いにインタビューして紹介し合う。	最初の出会いをさわやかな雰囲気にする。互いの情報を得て、自分との共通する部分を知ることができ、安心感をもって活動に入ることができる。	最初の出会いが学習活動全体の雰囲気を決定するので、できるだけさわやかに演出する。お互いの似顔絵を描いたり、参加の動機や趣味・好きな食べ物などを項目に挙げると盛り上がる。
ブレイン ストーミング	自由な発想で討議し、創造的に問題解決を目指す手法。特定の目標実現のために集団の効果を生かしながらアイディアを出し合ったり、行動方針を決定したりする。10人前後での討議が一般的で、リーダーと記録係のほかに参加者によって構成される。	和やかな雰囲気でき互いの意見を聞き、協力し合ってアイディアを練りながら、集団の効果を感じながら活動することができる。	他者の意見を正誤の判断をせずに受け入れること、自由に、アイディアの量を求め、お互いのアイディアを改善したり統合したりするのを原則とする。司会者は発言しない人が出ないように配慮する。
グループ討議 (パズル・セッション)	会議・講演会・研修会等で多人数の学習者全員の意見や考えを集約しながら進めるときに用いられる少人数	この手法を活用すると、すべての学習者の意見を全体の場	ワークショップの中では、この手法を繰り返すことにより全体と

	数(2~6 名程度)によるグループ討議。質問等がでにくいことに配慮して、グループでの討議時間を設定し、そこで出た質問や意見を集約するかたちで発表する。	に出しながらすすめられているという成 就感につながる。	グループとのやりとりで全体が進行していくような運営も考えられる。
アサーティブ トレーニング	a「受け身スタイル」、b「攻撃スタイル」のどちらでもない、c「自分も相手もともに大切にしようという相互尊重のスタイル」を学ぶ技法。	日常生活の場面における具体的なコミュニケーションの在り方をトレーニングできる。	他者の立場に立って考えたり感じたりすることを学ぶ方法として意義がある。

表3 相互学習プログラムの流れの中から、コミュニケーション・学びの発展への促し

	プログラムの流れ	学習者の動き	コミュニケーション	発展への促し
はじめ	心をほぐして、開かれた雰囲気をつくる	緊張や不安が薄れ、学習の目標を確認しやる気を高める	学習の仲間と知り合いになり、コミュニケーションをとりはじめる	学習課題への気づきや意欲がわく
展開	今まで気づけなかったり見過ごしていたことを体験によって知ったり、仲間と一緒に考えたりする	学習へ集中し、実際にやってみたいという気持ちが高まり、自分と向き合う場面が増える	協力して活動することができ、相互理解を深め信頼感を育てる	知識を得て、体験を通して理解を深め、新しい疑問や意見を話し合いから自分の意志として高める
まとめ	「はじめ」「なか」で得た学習を自分のものとして定着させる	自分の学習の「ふりかえり」を行い、仲間たちと体験したことや気持ちの変化を「わかちあい」する	「ふりかえり」「わかちあい」をすることによって一緒に学習できたことを共有することができる	学ぶから実行へ「わかる」から「かわる」へ

図2 相互学習プログラムの展開例 「高齢者に優しいまちづくり」

プログラムの流れ	展開のポイント	コミュニケーション効果や留意点
1 出会いと課題提示 ①自己紹介 アイスブレイク1 ②「わがまち一押し の食べ物」紹介 アイスブレイク2 ③「高齢社会の10の課題」を探す グループ討議 ④発表と意見交換 ⑤ふりかえり わかちあい	は じ め 展 開 開 ①最初の出会いを「自己紹介」の手法ですすめる。 ② 互いの関係の中に共通な話題を見つけさせ親し みをもたせる。 ③学習者の意識のすりあ わせを行う。高齢社会に はどのようなことが課題 となるのかをグループで話 し合い、意見をまとめて いく。合意形成のプロセ スを大切にする。	①②お互いを知ると同時に学 習参加者全体のコミュニケーションを 図ることができる。 ③共通の課題に対して思うこ とを自由に発言し、グループと しての意見をまとめていきな がら、違った意見の尊重や新 しい考え方への気づきにつな げていくことができる。

2 まちは「高齢者」にやさしいのか		④自分たちの意見との相違に気づかせる。	④同じグループの発表者への信頼感が高まる。他のグループの人たちの考えがわかり、活動への連帯感を味わう。
3「高齢者に優しいまちづくり」	ま と め	⑤話し合いや発表を通して今の自分の気持ちをグループ内で語り合う。 (わかちあい・ふりかえり)	⑤今回自分が学んだことを確認でき、またグループの人たちと、一緒に活動したことへの爽快感を味わい、次回また会って学び合えることへの期待が高まる。

どのような進め方が特定の方法の視点にとくに適しているのかを考慮すると同時に、一人ひとりがバラバラにならないこと、また教材にばかり向かわずに話し合いや協力関係を通して学びあえることを保障していくことが大切であると思われる。特に、まとめの段階でのわかちあい・ふりかえりでは、学習プログラムの中で一番大切な活動と考えられる。このことについては次の(5)にて考察したい。

③新しい興味への場面

クラントンによると、たいていの学習者は次のような段階を向かえるという。

・ほかの人に関心が向き、お互いの探求活動について知ろうとしたり話し合ったりする。

・お互いの家に行ったり、一緒に食事に出かけたりし

て社交的なつきあいをする。

・講座と一緒にいたり、講座後に会おうと計画したりする。

・話し合いやアイデアおよびプロジェクトを共同で行うことを決める人たちも出てくる。

・学習者は、さらに学習のための資源を求め、利用できるものをお互いに交換する。

・仲間や教育者とのやりとりによって活発化し、次の興味と熱意の段階へと移っていく。(クラントン P158)

おとなの学習者は、学習した新たな経験を自分の教育経験全体の中に統合し、仲間とのコミュニケーションを通して、さらに次の学習の場に向かおうとしていくと考えられる。

(5) ふりかえり・わかちあいについて

図3 学習の循環①

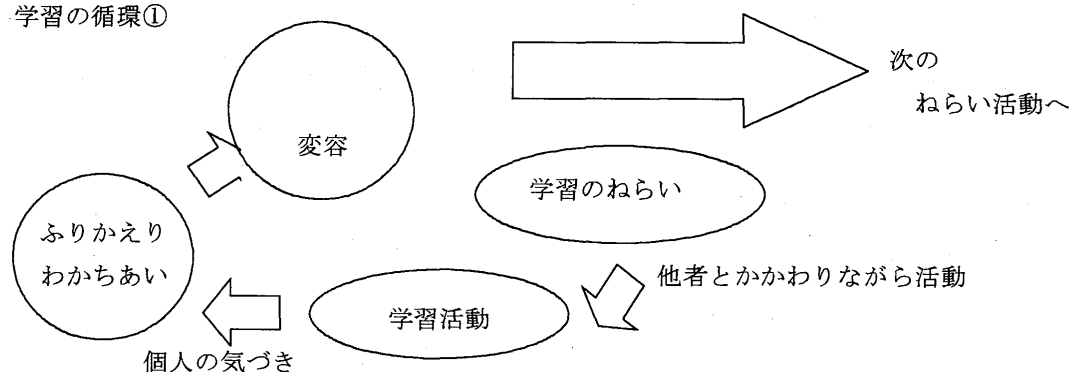
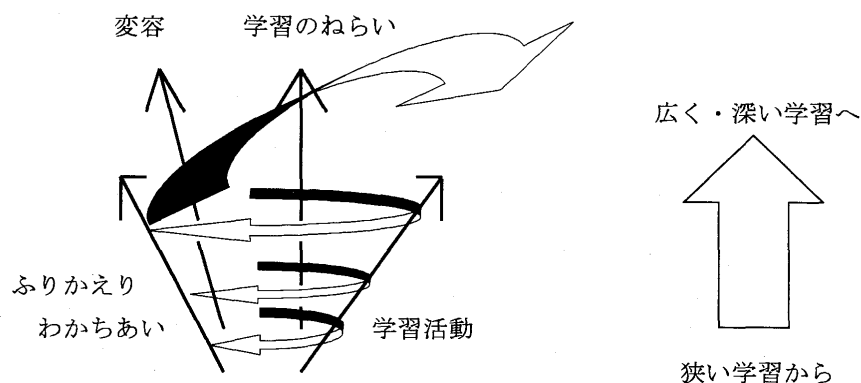


図4 学習の循環②



学習はねらい、活動、ふりかえり・わかちあい、変容がつながってすすめられていき、(図3) またそれは活動からふりかえりを行うことで個人の変容につながり、徐々に学習のステージも高くなって循環していくものと考えられる。(図4) このふりかえり・わかちあいは個人の変容に必ず必要な活動であり、この活動をなくして学習活動から直接的に変容を望むことはできない。なぜならば、ふりかえりでは学習者個人が、学習活動のプロセスをふりかえり、自分や他者、地域・社会などを見つめ直し、気づきや学びを整理する時間であり、わかちあいでは、それぞれの気づきや学びを互いに共有したり、自分の気づかなかったことを他者から気づかせてもらったりする時間として、学習活動で得た知識や体験を自分のものとして変える行動だからである。具体的にはふりかえりでは、学習活動でわかったこと・気づいたこと・疑問に思ったことを言葉に出したり・書くことによってふりかえり、また自分のために文章や絵に今の自分を表現することにより自分の感動や変化に気づき、より確かな自分と価値観を育むことを行う。また、わかちあいでは、具体的に一言ずつ語り合う感想やコメント・他の人の発見による感動を共有し、違いと共通点を認め合うことから新しい価値観に目覚め、違いを対比することによってより自分を鮮明に理解できるきっかけとする。この、ふりかえり・わかちあいは学習プロセスのまとめの段階だけでなく、最初の気持ち・途中の気持ち・終わりの気持ちといったかたちでアクティビティとアクティビティの間に入れることも効果的であると思われる。特に長期間のプログラムの場合、ふりかえりの気持ちをカードに書かせ、最終プログラムの後、最初・途中・終わりのふりかえりカードをつなげることにより、自分の気持ちの変容が実感することができ感動的な締めくくりとなり、更なる学習への期待が高まっていくと思われる。

(6) まとめにかえて

リンデマンのいう「教育はコミュニケーションによって進展する」(リンデマン P85) に着目し、おとなの学習者のコミュニケーションを生かしての相互学習の効果を考えてきた。多少の個人差はあるにしても、人は今の自分の生活の中で、自分の存在を実感して生活していきたいという気持ちがあると考えられる。それは、生活の中に起

こる現象に対して、自分で考え行動し、周りの人から承認され、さらに交流から新たな考えを得て、自らの考えや行動を深めていくことではないかと思う。そのために、自分をとりまく人間関係は、家族や友人だけでなく多様な年齢層の多様な経験を持つ人たちが多いほど、知的な交流の生まれる関係がつけれると考えられる。この豊かな人間関係が基礎となつて、時には学習が始まり、学習活動が活発に行われ、ますます新しい学習経験を積むことになる。もちろん、おとなの学習者は常に不安を抱きながら学習するということから、自分一人ではないという安心感を求めて相互学習のスタイルを好むということは考えられる。しかし、相互学習を不安からなるマイナス的な選択にとらえず、相互だからこそ学習を深めることができるということや、人間の持つて生まれた知りたい・できるようにしたいという気持ちを途中であきらめさせることなく、仲間同士協力しながら進展させていく学習として有効に活用していくべきと考えていきたい。また、その学習プロセスの中で何よりも大切な活動はふりかえり・わかちあいであり、このふりかえり・わかちあいが行われることによって一つひとつのアクティビティが意味ある活動になるということをあらためて強調したい。ここで、おとなの学習での相互学習の成果を生活の中に生かす意義をまとめると主に次のようなことが考えられる。

- ・学習者の生きがいや生活の励みになり、自己実現につながる。

- ・人びとの触れ合いや仲間づくりの機会を創出し、豊かな人間関係の形成や地域社会の活性化につながる。

このことを更に発展させるためにも、次のようなことを課題として考えていくことが必要と思われる。

- ・学習成果を生かせる魅力的な活動の場づくりに関する講座の参加を促す。

- ・学習成果を生かして活動したい人たちの希望と、それを受け入れる側(行政・施設・サークル等)の要請を調節する仕組みの充実。

- ・学習成果を個人の職業生活に有効に生かそうとすることへの社会的な評価の向上。

教育は豊かな人間関係によって進展すると考えていきたい。「学習の場に参加すればするほど、人は健康を維持し、社会の経済効果にも貢献する」(廣瀬隆人 講座) という

調査結果から考えれば、人間関係を豊かにすることができ
る学習がさらに発展すればするほど、人の健康・社会
全体の幸せに大きく貢献するのではないかと考えられ
る。

Ⅳ おとなの学習者の特質を生かした 研修 展開例

以上のように、おとなの特質から、それぞれの項目ご
とに学習の在り方について考えてきた。そこで、ここ
ではおとなの特質を考慮した研修の計画例を考えてみた。

テーマ		児童の人権について考える			
ねらい		児童に対する人権の在り方を知り、人権感覚を養う。			
対 象		B 小学校職員 24 名			
会 場		B 小学校 図書室			
準備物		ポストイット、移動黒板、まとめ用プリント			
設定時間		90 分			
	活 動	学習形態	活動内容	おとなの学習者の特質	支援上の留意点
導 入	1 アイズプレイク (連想ゲーム)	グループ (自由な配置)	いくつかのグループ になり、言葉を伝達し ながら、連想ゲームを 行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習に対する不安や恐怖心と自分に対する過小評価やプライドが混在する。 ・おとなの学習者は多様な動機をもって学習に参加する。 ・ふれあいを求めて学習する。 ・経験を資源として学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動に対する不安を解消するように自由な雰囲気で行えるように配慮する。 ・どのような目的で今回の研修を行うのか明確に説明する。 ・お互いを認め合い、親しみをもたせる。 ・今までの経験を生かして、楽しい雰囲気で行活動できるように支援する。
	2 説 明 (今日の研修 のねらい・活 動内容等につ いて)	全 体	今日の研修のねらい ・活動内容等を説明す る。	<ul style="list-style-type: none"> ・講義型の活動に安心感を覚える。 ・自己決定性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり長く時間をとらずに、短く簡潔に説明する。 ・この研修の有効性について説明する。
	3 ロールプレイ (家庭、学校、 地域の 3 つの 場面を想定し て)	グループ ごと ↓ 全体発表	6 つのグループをつく り、子ども、親、教師 地域住民の役に分かれ て、場面ごとに子ども に対する言葉かけを考 える。そして、普段子 どもに言っている言葉 と子どもを伸ばす言葉 を考えロールプレイで 発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習に取り組む際に、自己決定性が大きな推進力となる。 ・対話的なコミュニケーションを深め、親しくなることで学習の意欲が向上する。 ・長年にわたって得た多くの知識や経験を、自分の学習の場にもってくる。 ・自分がよく思われていない、笑われるのではないかと不安や恐怖心がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習者の多様な経験を引き出すための言葉かけを行う。 ・仲良く活動できるような場の雰囲気や言葉かけに配慮する。 ・一人ひとりの経験を生かして学習できるように、配慮する。 ・発表の際は、一人ひとりの演技を認めあえるような雰囲気づくりに配慮する。
展 開	4 グループ 討議 ・ロールプレイ の感想 ・気持ちの変 化 ・今後の課題 など	グループ ごと ↓ 全体発表	ロールプレイで同じ役割 を担当した人同士でグ ループになり、自分の子 どもに対する言葉かけ をふり返り、気持ちの 変化を話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・多様性がある。 ・他の人に関心が向き、互いの探求活動について話し合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりが違った考えをもっていることに着目させ、さらに多様な考えが引き出せるように配慮する。 ・自由な雰囲気で行話し合いができるように支援する。

				・すでにできあがってしまった態度や思考パターンなどを学習の場面にもってくる。	・他の学習者の考えを尊重し、自由に話し合える雰囲気づくりに努める。
まとめ	5ふりかえり	個人	・わかったことをまとめ、キーワード集を作成する。 ・各自の気づきを発表する。	・即効的な学習効果を求める。 ・蓄積された経験を学習の資源とする。	・実用性を例示し、学習の効果を体感させる。 ・今回の学習の経験をふり返ることで、学びを定着させこれからの社会生活に生かせるように支援する。

ここでは、子どもに対する人権の在り方を知り、人権感覚を養うというねらいで研修を行う。そこで、学習者が子どもの人権について考え、人権感覚を磨き、今後の生活に役立てるという目的で展開を組み立てることが大切である。

そこで、学習活動の中でロールプレイとふり返りに重点をおき、計画を立ててみた。

まず最初におとなの特質からみると、学習に入るとき不安や緊張があると考えられる。そこで、今回はアイスブレイクの手法から連想ゲームをすることによって、場の雰囲気を和ませ、自由な雰囲気での学習に入れるように配慮した。また、連想ゲームを取り入れることで、おとなの学習者の特質である多様性を生かして、様々な考えを引き出すことも学習効果をあげるものと考えられる。

つぎに、今回の研修のねらいや内容等を講義型で説明した。これは、一斉講義型の学習に慣れたおとなの学習者の特質を考慮し、安心して学習できる場面として取り入れた。また、ここでは人権教育についての知識を学習者に伝達する意味でも効果があると考えられる。しかし、自己決定性のあるおとなの学習者であることをふまえ、説明はできるだけ短く簡潔に述べるのが適切であろう。

次に、自分の経験をもとに、グループでコミュニケーションを深めながら学んでいく手法を考え、ロールプレイを設定した。ここでは、今までの自分の言動をふり返り、子どもの気持ちを考えた言葉かけを演じることで、子どもの人権を認め、配慮すべき点に気づかせていく効果を考えた。この場合、学習者は今までの経験を生かして子どもに対する言葉かけを考える。そこで、各学習者の多様な考えを引き出し、演技に生かしながら学んでい

くように方向付ける必要がある。また、ロールプレイでは他の学習者の前で演技をすることが求められるため、人前で演技することに関して、笑われたりはしないかという不安や恐怖心がある。そこで、一人ひとりの演技を尊重し、自由にできる雰囲気づくりに配慮して活動させていくことが大切であろう。

次に、グループで自由に話し合いながら、ロールプレイの活動をふり返るために、グループ討議の時間を考えてみた。おとなの学習者の特質を生かし、多様な意見を出し合い、考えを深めていくことによって、改めて子どもの人権について考える活動としたい。しかし、おとなの学習者はすでにできあがってしまった思考パターンにとらわれがちであるので、話し合いに柔軟性をもたせ、一人ひとりの意見を尊重できるように支援していくことも大切だと考える。

最後に、学習の定着を図るために、ふりかえりの活動を設定した。ここでは、ふりかえりは今回の研修を反省し、学習を深めるために、キーワード集を作成する活動を考えた。おとなの学習者の特質として、即効的な学習の効果を求めることから、こうしたパンフレットを作成することで、学習をふりかえると同時に、今後の実生活に役立てることができよう。また、ふりかえることにより、学習内容が蓄積され、新しい経験として自らの資源となることも考えられる。

このように、おとなの学習の計画を立てる上で、まず目的からどんな展開が適切かを考え、おとなの学習者の特質に配慮しながら活動内容を検討し、効果が実感できるようなふりかえりが必要であると考えられる。

V まとめ

以上のとおりおとなの学びについて、おとなの学習者の特質に着目し、学習支援のあり方を考えてきた。学習とは生活の中での意識や行動様式の社会的に良好な継続的変容であると考えられる。具体的にいえば、変える必要性を認識し、自ら進んで改善していこうとする意志をもつことであり、さらに学習者同士が互いに学び合うことをとおして、自分自身を高めていくことがおとなの学習のめざす一つの方向であるともいえる。

そこで、学習支援者はおとなの学びをより深めさせるためにおとなの学習者の特質を重視し、学習者のニーズにあった学習課題や自己決定を促すことができる学習プログラムの設定、快適な学習環境の整備、配慮ある支援者のことばかけを心がけ、学習者がふりかえり、気づくことを大切にすすめることが必要と考えられる。

また、おとなの学習者の特質から、学習プロセスの中で不安を取り除き、それぞれの経験を生かし、コミュニケーションを深めながら学ぶことで、精神的に安定し、お互いを尊重しあうことにより、良好な人間関係の中で学習を進めることができる。つまり、精神的なゆとりが学びにつながり、学ぶことでさらに精神的なゆとりが生

まれるのである。これが、主体的に学ぶというものの基礎となるのではないだろうか。

学校という一つの社会においても、職員や保護者が互いに尊重し合い、精神的なゆとりをもった関わりをもつことで、それぞれの立場を理解し合い、児童生徒の健全な成長という目的に向かい、ともに前向きに考えることができるであろう。そして、豊かな人間関係のなかから、ゆとりをもち児童生徒への指導を充実させることもできるであろう。

また、このおとなの学習者の特質は、一般的におとなだけでなく、幼児、児童、青少年などのいわゆる子どもにも当てはまるものがあると考えられる。すなわち、小学生や中学生・高校生も、わずかながらも経験という財産をもち、不安とプライドを併せ持った学習者であると考えてよいのではないか。私たち教員はこのことを再認識し、児童生徒が自分らしく生きていけるよう、学校生活の中で今そこにいる自分に気づき、自分をふりかえることができるきっかけづくりやことばかけ・教材の研究などでの支援を考えていきたい。

そして、さらに子どもたちがやがておとなになったときにも、学習者として自分を高めていくことにつながっていくものと考ええる。

—参考および引用文献—

- (1) エデュアード・リンデマン著 (堀 薫夫訳) 『成人教育の意味』 学文社 1996
- (2) マルカム・ノールズ著 (堀 薫夫、三輪健二訳) 『成人教育の現代的実践』 鳳書房 2002
- (3) クラウス・マイセル他著 (三輪健二訳) 『おとなの学びを支援する』 鳳書房 2003
- (4) パトリシア・クラントン著 (入江直子、豊田千代子、三輪健二訳) 『おとなの学びを拓く』 鳳書房 2005
- (5) ジェニー・ロジャース著 (藤岡英雄監訳 徳島大学生涯学習研究会訳) 『おとなを教える 講師・リーダー・プランナーのための成人教育入門』 学文社 1997
- (6) ウィリアム・A・ドレイブス著 (三浦清一郎、末崎ふじみ共訳) 『研修・訓練における成人指導の方法』 全日本社会教育連合会 1990
- (7) ジョン・デインズ／キャロライン・デインズ／ブライアン・グレアム著 (小川 剛、妹島長子訳) 『おとなが学ぶときに』 全日本社会教育連合会 1996
- (8) シャラン・B・メリアム／ローズマリー・S・カファレラ著 (立田慶裕、三輪健二監訳) 『成人期の学習—理論と実践』 鳳書房 2005
- (9) 廣瀬隆人／澤田 実／林 義樹／小野三津子著 『生涯学習支援のための参加型学習のすすめ方』 ぎょうせい 2000
- (10) 池田秀男／三浦清一郎／山本恒夫／浅井経子著 『成人教育の理解』 実務教育出版 1987
- (11) 住岡英毅著 『生涯教育の人間関係』 アカデミア出版会 1985
- (12) 大田信男他著 『コミュニケーション学入門』 大修館書店 1994
- (13) 川野辺 敏／山本慶裕 編著 『生涯学習論』 福村出版 1999
- (14) 『教育大辞典』 第一法規出版 1979

上記の著書の本文中への引用については、() 内に著者名とそのページのみを記入した。

おわりに

このたび、2005（平成 17）年度の内地留学の機会をいただき、大変整った環境・設備、そして数多い社会教育関係の文献・資料のある宇都宮大学生涯学習教育研究センターで、半年間にわたる研究活動に取り組んで参りました。

指導教官で同センター教授の廣瀬隆人先生には、日々新しい社会教育の実際を様々な機会をとおして体験させていただきました。特に成人教育においては、本研究を進めるにあたり、懇切丁寧な指導をしていただくとともに、基礎基本をゼミや公開講座等で熱心に教えていただきました。さらに社会教育の意義や学校と地域の連携、ボランティアについての各研修会および講演会等に行かせていただき、大変参考になったと同時に日頃の先生の教育に対する厳しい姿勢に、教員として大変刺激を受けました。また、内地留学が意義あるものにあるよう、常に声をかけていただいた上、多くの御配慮をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

同センター長の塚本純先生には、常にお気遣いをいただき、温かい励ましと激励の言葉をかけていただきました。充実した研究ができるようにと先生の御配慮に対しお礼申し上げます。同センター助教授の佐々木英和先生には、多くの学びの機会をいただきました。大学院のゼミ、学部の講義等に出席させていただきただけでなく、

情報機器の活用法や参考文献の紹介など多岐にわたりご配慮いただき、また内地留学全般において温かく接していただき安心して研究に取り組むことができました。さらに、同センターの公開講座にも参加させていただき、たくさんの受講者との学びを経験させていただきましたことに大変感謝いたしております。

同事務所の板谷友樹さんには、いつも誠実に対応していただき、研究資料を整えることができました。また、事務用品や印刷機具の使い方など懇切丁寧に教えていただき、気持ちよく研究に励むことができました。ありがとうございました。

そして、この一年間にお世話になった同センターの関係者の皆様、関係学部・大学院のみなさん、そして、研究に際し御助言をいただいた多くの自治体の関係者の皆様の御厚情にあらためて感謝いたします。

最後になりましたが、内地留学という教員生活でも大変貴重な機会と時間を与えていただきました、栃木県教育委員会、栃木県教育委員会南那須教育事務所、馬頭町教育委員会、ならびに内地留学期間中、温かく御支援いただきました馬頭町立武茂小学校長藤田悦子先生、鹿沼市立西中学校長向田伸一先生、栃木県立のぞみ養護学校長浜野英一先生をはじめ、同校の教職員の皆様に心より感謝し、お礼を申し上げます。

2006（平成 18）年 3 月